

日曜附錄

蘆の丸屋を尋ねて

河西柏葉

二十一日の日だった、佛聖花本十一世藤秋翁が花本一世松永貞徳翁の墓参りの爲上馬羽實相寺に杖を曳かれた随行したのが門下の松原署長松山縁秋、在京西浦騎鶴、山口淡月、黒田素雲氏等と小供とであつた

前日の雨が霽たとは云ひながらまだ名残を止めて將に驟雨も驟らん氣配何れも雨傘の用意意りなく梅黄社を出たのが午前十時、市電稻荷親進橋で下車して鴨川堤すみれ、たんぼ、ペンく草の咲き盛り柳緑に微風あり俳味横溢する長堤を俳談にきざむ足どり折々に聞く汽車の笛、行くく田園開く處花菜の黄に燃のんとする美観眼も醒むるばかり時に一天晴れ互つて日麗かに一行の今日を有意義な身しめられた、太古に似たる鴨川の長い十橋を渡つて半里を續く田園道を縫ふて行く、白い手拭に輝く柳の煙のぼんすとすなを纏繞する娘の袖打つ姿も俳材に駄句の連發知らず路はあつて十一時上馬羽村に入る、實相寺は村の中程にありて路傍に石標ありて「佛祖松永貞徳翁の墓あり」と記す、實相寺は日蓮宗で山門堂宇共に東面する一

之を左に一葉軒貞徳居士の墓標あり左入口の處三宅嘯山先生の碑あり右側面に大原翼述並書の徳徳文「瓦葺」と刻しあり先生は貞徳の俳風を學び貞徳翁の徳を慕ひ世に宣傳したる博學の士享和元年四月十四日歿するの土其碑に相對して花守信年の墓標あり、前記一葉軒貞徳居士は誰なるか住職之れを詳にせず記録さへ殘るなき恨みがあつたが聽秋翁は花本二世貞室は一葉軒と庵號を云ふが貞室ならんか尙研究の價があると言はれた底回たく能はず墓參を終りて蘆の丸屋を見る瀟洒たる茅葺平家三疊に四疊半の座敷に小さき勝手あり庭園の櫻さては柳茂つて自然の寂あり泉石苔あつていやが上にも清雅の趣を増す庵内に石川文山の筆蘆丸屋一の扁額がある、茲に少しく翁の略歴と蘆丸屋の由緒を語つて見る貞徳翁は元龜二年京に生る父は永種、松永彈正藤原久秀の

小寺、住職の案内によつて堂の南裏なる貞徳翁の墓に詣り墓面は約四坪三方生垣によつて圍まれ中央に花崗岩角の高き七尺に餘る墓石あり一肩に南無妙法蓮華經、中央に遺通軒貞徳居士、左に承應二癸巳年十一月十五日」と彫刻苔蒸して二百五十年の昔を偲ばるゝものあり地下六尺既に屍は朽てありれども貞徳翁の和歌に連歌に俳諧の祖として今日の俳諧の隆盛を爲さしめた偉大なる高名は朽す花本講義を申し上げさせたが帝の寵愛の道統を繼ぐ十一世翁の眞香に芳しくも自ら涙も催されずには居られなかつた、右側に松永昌三

である、進んで細川幽齋に親炙して古今集の秘訣及連歌の奥旨の傳授を受けた、其間名刺に魚らず諺々として道を講じ或時は路上に於て民衆に徒然草や和歌の講義を爲すこと屢々慶長三年八月初盛政、衛前久公准后九條兼孝公は其非凡を稱讚し給ふて幽齋並に里村紹巴に命じて花吹翁の號を以てせしめ

を造り翁を住まはせ給ふたが翁は琴書を携へて住み花弁を栽培柿園を營んだ之に「蘆の丸屋」と名づけたもので此室は連歌俳諧を弄んだ處であつた承應二年十一月十五日八十三の高齡で歿したが門下中には僧侶も多く日蓮宗の大信者であつたので其門生で當時實相寺の住職の好意によつて實相寺に葬つたものであるらしくやがて蘆の丸屋はそこに移轉したもので安政年間荒廢したものを村の有志が修理したと同時に今日の如く小さくされたものであるらしい、現在實相寺には翁の眞筆四五點を藏して居るが經文の一巻は得難いもので所々失ふたものがあるのは惜しいものであると嘯山先生が裏書してある

貞徳翁の墓前手向吟
流れ汲みて只恥づるのみ花の影
花ちりり蘆の丸屋の園古りて
麗かや丸屋をめぐる五六人
秋 葉

愛し方廣寺境内南の地を下して庵

の起る

秋 葉

秋 葉